

藤原宮跡から出土した馬の産地推定と飼育形態について

藤原宮跡の発掘調査では、これまでに藤原宮の造営時に開削された運河を中心として、馬などの動物の骨や歯が出土しています。関節炎のある馬の骨も認められ、造営資材の運搬などに利用された駄馬（荷馬）であったと考えられます。

奈良文化財研究所は、平成22年から25年にかけて、東京大学と連携して藤原宮跡から出土したこれら馬の骨や歯の様々な同位体分析を実施しました。その結果、以下のことが明らかとなりました。

- ・ 出土した馬の移入や産地推定を検討するために、ストロンチウム同位体分析と酸素同位体分析を実施しました。ストロンチウム同位体分析により、奈良盆地以外から持ち込まれた個体が非常に多いことが明らかとなりました。さらに酸素同位体分析によって馬の産地を推定したところ、多くが東日本内陸部で産まれた個体でした。これは藤原宮の造営に際して、名馬の産地とされる東日本内陸部から多くの馬が持ち込まれていたことを示しています。
- ・ 出土した馬の食性を復元するために、炭素同位体分析を実施しました。その結果、C3植物者（主にC3植物を食べて、C4植物をあまり食べていない個体）からC3/C4植物者（C3植物とC4植物を同じくらい食べていた個体）が確認できました。馬の品質に応じて与えた飼料を規定した厩牧令きゅうぼくりょうを参考とすると、持ちこまれた馬の中には規定では細馬（上馬）のみに与える粟を多く与えられた幼齢馬も認められ、手厚く飼育された個体でも駄馬として利用されていたことが明らかとなりました。

こうした学際的な連携研究の成果は、『藤原宮跡出土馬の研究』（奈良文化財研究所研究報告第17冊）として報告書にまとめ、今年3月31日に刊行しました。